

プロジェクトマネジメント演習 1

第 2 班 報告書

158576C 新里亮太

2015 年 8 月 17 日

目次

1	プロジェクト憲章	1
1.1	プロジェクト名と概要	1
1.2	メンバーと組織	1
1.3	目標	1
1.4	独自性と制約	1
1.5	成果物	2
1.6	日程と終了	2
2	プロジェクト計画・実績	3
2.1	目標とスコープ	3
2.2	WBS とアクティビティ	3
2.3	スケジュール	3
2.4	リスクと課題	3
2.5	チームとコミュニケーション	5
2.6	実績と品質	5
2.7	応用	5
3	終結	5
3.1	概要	5
3.2	メンバー評価	6
3.3	プロジェクト評価	7
3.4	教訓	7
3.5	講義	7

1 プロジェクト憲章

1.1 プロジェクト名と概要

本プロジェクトは、「ホログラムで広がる無限の世界」と題し、現在研究・開発が進んでいるホログラム技術と、Fairy Lights という技術を組み合わせて部屋に投影することで部屋の内装などを変更する。

1.2 メンバーと組織

学部生

- 155702F 大城由也
- 155708E 中村孝道
- 155743C 平良柚那
- 155750F 翁長泰司
- 155756E 金城愛梨
- 155757C 平本嶺河

院生

- 158574G 比嘉健太
- 158576C 新里亮太

1.3 目標

部屋の模様替えをする際、かなりのコストと労働力が必要となる。また、宇宙空間や大自然の中で生活することは現代社会に生きる私たちにとって非現実的であると言える。更に、アレルギーや危険性などで部屋で飼うことのできない動物などもある。これらの問題を解決するために、触ることのできるホログラム技術を用いて部屋の内装を変更したり、動物を投影する。

1.4 独自性と制約

独自性

- プロジェクトメンバーの全員が情報工学科の学生である
- 触れるホログラムを用いて部屋の内装などを変更する
- ホログラム投影機を一般家庭に普及させる
- 現段階では研究中の技術である Fariy Lights を用いて企画を行う

制約

- 資金がない

- 講義やアルバイトなどで全員が同じ時間仕事できるわけではない
- 院生を含めたミーティングが週に一度しかない
- プレゼンテーションに慣れているメンバーが居ない

1.5 成果物

- 発表用スライド
- 最終報告書
- 予稿

1.6 日程と終了

1.6.1 日程

- 6月12日 第一回ミーティング
 - プレーンストーミングによるアイデア出し
 - 成果物報告場所の作成 (GoogleDrive にて共有)
- 6月16日 第二回ミーティング
 - テーマ決定
 - ホログラムを用いて何ができるのか話し合い
- 7月3日 第三回ミーティング
 - 中間発表練習
- 7月5日 第四回ミーティング
 - 中間発表練習
- 7月6日 中間発表
- 7月17日 第五回ミーティング
 - 最終発表の仮原稿添削
- 7月24日 第六回ミーティング
 - 最終報告書添削
- 8月6日 第七回ミーティング
 - 最終発表スライド添削
- 8月7日 第八回ミーティング
 - 最終発表原稿添削
- 8月12日 第九回ミーティング
 - 第一回発表練習
- 8月13日 第十回ミーティング
 - 第二回発表練習
- 8月14日 最終発表

1.6.2 終了

- 8月14日のPD 最終発表にて発表する。また、スライドや予稿の提出も期限内に行う。

2 プロジェクト計画・実績

2.1 目標とスコープ

2.1.1 目標

8月14日のプロジェクトデザイン最終発表にて発表する。また、スライド、予稿を期限内に提出する。

2.1.2 スコープ

以下にプロダクトスコープを示す

- 最終発表スライド
 - － 8月14日までにアップロードする
 - － 12分の発表に十分収まるスライドを作成する
- 最終報告書
 - － 6ページの最終報告書を作成する
 - － 企画内容や新規性・社会性など指定された内容を記述する
- 予稿
 - － 企画内容やメンバーなどを指定の場所にアップロードする
 - － 発表スライドをアップロードする

2.2 WBS とアクティビティ

以下に WBS を示す。

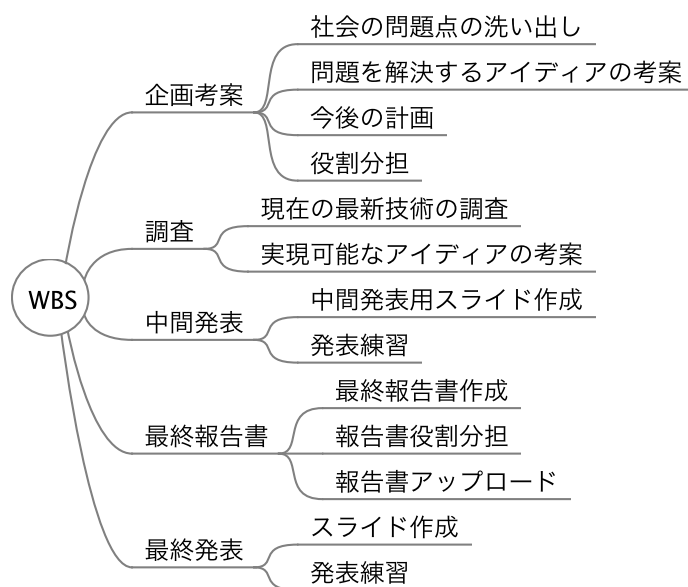


図 1 WBS

2.3 スケジュール

以下にガントチャートを示す。赤が予定していたスケジュールで、青が実際のスケジュールである

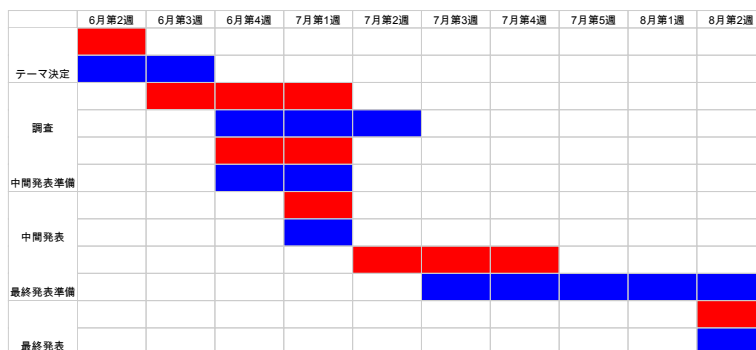


図 2 ガントチャート

2.4 リスクと課題

予見されるリスクとその解決策を以下に示す。

- 来なくなるメンバーが出る
実際に集まりへの参加率が低いメンバーはいたが、こまめに連絡を取ることで全く来ないメンバーは出なかった。
- メンバーと連絡が取れなくなる
メンバーと連絡が取れなくなることはなかったが、参加率が低いメンバーには直接声をかけるなどした。
- 仕事をしないメンバーが出る
メンバーそれぞれに仕事を分担し、仕事が難しいメンバーにはサポートを付けて仕事に取り組ませた。
- 成果物が最終発表に間に合わない
最終発表に間に合わせるため、毎回のミーティングでスケジュールを確認し遅れている場合はミーティングを増やすなどした。

2.5 チームとコミュニケーション

利用したコミュニケーションツールを以下に示す。

- LINE
日々の連絡は LINE を用いた。LINE には既読マークがあり、最低限目を通したかどうかは確認できるためある程度有効だった。
- GoogleDrive
議事録や成果物の管理は GoogleDrive を用いた。また、次回のミーティングの連絡は GoogleDrive にアップロードされる議事録と LINE を用いて二重に連絡した。

2.6 実績と品質

成果物の評価は 2 名の PM で行った。具体的にチェックした項目を以下に示す。

- 新規性・社会性・有効性はあるか
- 企画内容は実現可能か
- 十分に調査がなされているか
- 最終報告書・発表スライドは論理的な展開になっているか

2.7 応用

今回は 2 名の PM が付いたが、メイン PM とサブ PM で分けて、班活動の指揮はメイン PM が執る。どちらの PM も互いに意見を出しあいより良い企画になるようアドバイスを送った。基本的に互いの PM の意思が統一されていたので方針はメイン PM に任せていた。

3 終結

3.1 概要

プロジェクト開始後、まずはリーダーと議事録係を決めた。その後、ブレインストーミングを行いテーマを決定した。ブレインストーミングに慣れていないメンバーが多いようだったので、PM が適宜アドバイスや問いかけをしながら議論が円滑に進むようにした。その後は週に一回の PM も交えたミーティングと適宜メンバーだけのミーティングを行った。

ミーティングでは毎回議事録や資料を作成させ、GoogleDrive にアップロードさせることで後からメンバーが見返せるようにした。

中間発表・最終発表前には発表練習を行い、より良い発表になるよう PM からアドバイスをし、適宜スライドの添削などを行った。スライドにはまとめページや質問回答用ページを用意させるなどより伝わりやすい発表を目指した。また、PD2 と一緒に発表練習を行うことで先輩の発表を見せ、良い刺激を与えたのではないかと思う。

最終報告書はまず草案を作成させ、2 名の PM でかなり細かいところまで指摘し添削した。また、最終報告書草案の作成時点で最終発表を想定しながら作成させた。

最終発表二日前と前日で発表練習をし、最終発表を迎えた。二回の発表練習を行っているだけあって、PM としてはある程度満足できる発表になった。最終発表をもってプロジェクトを終了とした。

3.2 メンバー評価

ループリック法にて各メンバーと PM を評価した。評価は A から F までの 5 段階評価になっており、それぞれの評価を統合したものを以下に示す。

- 155702F 大城由也 B

最終報告書草案作成など、与えられた仕事をきちんとこなした。また、企画のキャッチフレーズを考案するなど文章作成の仕事で能力を発揮していた。仕事をしっかりこなすのでメンバーからの評価も高かった。ミーティングでは少し発言が少なかったとの意見も出ていた。

- 155708E 中村考道 D

最終報告書草案作成など、与えられた仕事はしていたようだった。ミーティングへの参加率の低さや、参加してもあまり話を聞いてないことなどからメンバーからの評価は低かったが、鋭い意見を出すなどで多少の評価を得ていた。

- 155743C 平良柚那 A

リーダーとして班をまとめた。自ら率先して仕事を行った。また、他のメンバーの仕事も積極的にサポートし、メンバーからの信頼を得ていた。PM にアドバイスを求めに来るときも彼女の方から積極的に動き、常にどうしたらよりよい企画になるか考えていた。

- 155750F 翁長泰司 C

主にスライド作成係として活動した。ブレインストーミングの際に積極的に発言するなどし

て議論を盛り上げた。与えられた仕事を自主的にできていなかったが、PM からの指摘を真摯に受け止めスライドを完成させた。自分の仕事が終わるとミーティングでの積極性が少し失われた。

- 155756E 金城愛梨 A

議事録係として毎回のミーティングの議事録・マインドマップ作成を行った。また、議論の際に積極的に意見やアイデアを出し議論を盛り上げた。発表係としても活動し、原稿作成や当日の発表など大きな仕事をこなした。リーダーと並んでグループの中心人物だった。

- 155757C 平本嶺河 C

最終報告書作成係として活動した。与えられた仕事はしっかりこなし、わからないところは自分から聞くなどして仕事を完遂しようと努力した。議論の際に積極性に欠け、自分から発言することが少なかったように思えるが、ミーティングへの出席率は高かった。

- 158574G 比嘉健太 A

サブ PM として活動し、議論の際に様々な意見を出すなどしてメンバーからの信頼も厚かった。

- 158576C 新里亮太 A

メイン PM として活動し、グループ活動を指揮した。

3.3 プロジェクト評価

成果物を期限内に完成させ最終発表を行った点では評価できる。企画内容の掘り下げを行うタイミングが遅れてしまい、内容としては多少不十分だった点もある。

企画が実現できるかどうかの調査はしっかりできており、研究・開発が進んでいる技術を企画に取り入れるなど現実性のある企画ができた。

メンバー間のコミュニケーションは取れており、完全に参加しなくなるメンバーが出なかった点は幸いである。

3.4 教訓

企画立案の際には、最初の段階で内容の掘り下げを行う必要があることを知った。最終報告書作成やスライド作成時点で慌てて企画を掘り下げ始めると内容が二転三転して思うようにまとまらなかった。

3.5 講義

PD に関してはテーマ設定の見直しが必要であると思われる。テーマが抽象的なため、様々な案が出る可能性はあるが、例年よく見る企画（メガフロート、鉄道、沖縄と本州を結ぶトンネル等）が多くあり PM 側としてはどう企画を決定するか悩ましい部分もあった。

最終発表を見て、調査の重要性を講義で取り上げる必要があるように感じた。調査が不十分でデータに基づく企画がなされていないようであった。

PM 演習の講義に関しては、互いのグループの進捗状況や問題点を共有できて有意義だったと思

う。また、他学科の活動についても知ることができ互いに刺激になったと思う。